

2022年横浜ナザレン教会・復活後第五主日(5/22)礼拝

「主イエスの姿を映して」

使徒言行録第4章1節から12節

【聖書】

使徒言行録4:1 ペトロとヨハネが民衆に話をしていると、祭司たち、神殿守衛長、サドカイ派の人々が近づいて来た。2 二人が民衆に教え、イエスに起こった死者の中からの復活を宣べ伝えているので、彼らはいらだち、3 二人を捕らえて翌日まで牢に入れた。既に日暮れだったからである。4 しかし、二人の語った言葉を聞いて信じた人は多く、男の数が五千人ほどになった。

5 次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。6 大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。7 そして、使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問した。8 そのとき、ペトロは聖霊に満たされて言った。「民の議員、また長老の方々、9 今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてであるならば、10 あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。11 この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。12 ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

1 主イエス・キリストを映し出す

今、私たちが礼拝で聴いています使徒言行録は、十字架の死から三日後に甦らされた主イエスが、四十日間、弟子たちと共に過ごした後、父なる御神の御許に昇っていかれた、その十日後に聖霊なる御神が降られて始まった使徒達の物語、教会の物語です。ルカ福音書の続編と言われており、福音書の中の主イエスを思い起させる描写があちこちに出ています。まるで、父なる御神の右におられる主イエスお姿が聖霊なる御神を通して、地上にいる使徒達の上に映し出されているかのようです。

今日の聖書もそうです。時刻は、夕方近く。ペトロとヨハネが神殿で主イエスのみ名によって足の不自由な男を癒したのは、午後三時の祈りの時。既に三時間ほどが経っています。今日の聖書の前に描かれているペトロの説教が終わると、ペトロとヨハネは集まった民衆の間に入って行き、一人一人に伝えたのでしょう。「主イエスは、本当に甦られた神からの救い主、メシアであり、私たちはその証人です。足が不自由だったこの人も主イエスのみ力によって癒されました。」二人は無我夢中であつた、と思います。男で五千人が仲間に加わった、とルカは記します。

この使徒言行録は、統計資料ではなく、物語。5000人というのも、実際に回心した人の数だ、と受け取る必要はありません。しかし、何故ルカはわざわざ、五千という数字を記したのか、その理由を考えるのは意味があると思います。

私は、この数字から、五千人の給食を思い起こしました。かつて、主イエスは、弟子たちと共に、人里離れた場所へと退くのですが、群衆はその後を追います。主はこの人々を迎え入れ、神の国について話し、病人を癒されました。夕暮れが近づいた時、男だけで五千人もいた人々に、五つのパンと二匹の魚を分け与えられる様子をルカは次のように描きます。「**主イエスは、パンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りをささげ、裂いて弟子たちに渡して人々に配らせた**」(ルカ9:16)その光景に重ねて今日の聖書を読むと、夕暮れの気配が漂う神殿のソロモン回廊の前で、主イエス・キリストのみ名の力、福音の力を、ペトロとヨハネが群衆に手渡しで配って回っている様子が目に浮かびます。二人が人々の間で働いている間、主イエスは、天の父のみそばから、二人の姿を喜びつつ眺めておられた、ペトロとヨハネによってイエス・キリストの命を分け与えられた5000人の顔は主の喜びで輝いていた、と想像する事は許されるのではないのでしょうか。

2 ペトロとヨハネの逮捕

このように主イエスを映し出す使徒たちの物語ですが、映し出すのは、よいことばかりではありません。苦難も試練も主のあとをなぞるように、彼らを襲います。1節、「**祭司たち、神殿守衛長、サドカイ派の人々**」が近づいて来た、とあります。ルカ福音書第22章の主イエス逮捕の場面が思い起こされます。「**神殿守衛長**」、と出て来るのも、主の逮捕の時と同じ。神殿守衛長とは、大祭司に次ぐユダヤ社会ナンバー2の地位にあり、祭司たちはその部下です。次に出て来るサドカイ派は、大祭司一族をはじめとした祭司貴族やエルサレムの貴族たち、ユダヤ社会の支配者たちの集まりです。権力者達が、使徒達を逮捕するためにやって来ました。いつの時代も、支配者たち、権力者達が最も嫌うのは、彼らの権威や正当性に疑いを抱かせるような話が、民衆に広がることです。そういう話をする者たちに苛立ち、口を塞ごうとするのは、古今東西の権力者たちが繰り返しやってきた事。神殿守衛長達も又、自分達に不都合なことを話すペトロとヨハネに苛立ちます。

3 宗教の姿を映し出す最高法院

彼らは、ペトロとヨハネを捕らえ、一晩、牢にいます。ユダヤの法律では、夜、裁判を開くことはできなかったからです。ここも、同じように捕えられ、翌朝、最高法院に引き出された主イエスのお姿が二人と重なります。

やがて朝が来ました。ルカの語り口も緊迫感を増します。「**議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族**

が集まった。」主イエスが十字架に架けられた日と同じように、最高法院が招集されたのです。たった二人の元漁師のために、ユダヤ社会のトップにいる人々が続々と集まってきます。6節で最初に名前が出て来るアンナスは、正確には「元大祭司」です。彼は、この時より十五年ほど前に、大祭司を引退していますから。ですが、その後、彼の息子や婿たちが、次々と大祭司に就任しており、アンナスは長い間、ユダヤ政治の中心人物として君臨していたようです。カリアファは、彼の娘婿で当時の大祭司。その次のヨハネは、アンナスの息子でカリアファの後に大祭司に就任したヨナタンではないか、とされています。次のアレクサンドロはどういう人物かは分かっていません。が、アレクサンドロというギリシャ風の名前から、ギリシャ・ローマ文化の影響が大祭司の家系の中にも及んでいる事が伺えます。ここに、大祭司という最高権力を長く掌握していたアンナス一族の背後には、ローマ帝国が控えている事が暗示されているのです。勿論、ユダヤ教の律法に忠実な信徒達は、大祭司一族の背後に、外国人であるローマ人がいたなんて、考えてもいないでしょう。

このように考えると、6節の大祭司たちの名前リストには、この世の「宗教」の正体が描かれているようです。真の神を神とせず、ローマ帝国というこの世の武力を背景にして信仰者を支配しようとする。この世の「宗教」は、古代では偶像の神々、そして現代では無神論と、様々な姿を取りますが、その正体は変わらないように思います。自分達人間を神とする「人間教」です。

神の民の大祭司一族をはじめとした権力者達の間にも、人間教が入り込み、蔓延していました。それは、彼らがペトロとヨハネを最高法院の真ん中に立たせて放った質問によく現れています。「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか。」彼らは、ここで、自分達を超えるような権威があってはならない、自分達の名前以上に力を持つ名があってはならない、お前たちは私たち以外を神としている、と使徒達を責め、それだからこそ主イエス・キリストを責めています。このように「宗教」は、真理と全く逆のことをするのです。神が人を造られた、それが真理であるのに、人間である彼らが、神を造りだします。勿論、偽物の神、偶像です。又、全知全能の神が被造物である人を裁かれる、それが真理であるのに、人間である彼らが神を裁こうとする。神が人を教え導くのに、神を自分達の都合のよく利用しようとする。

しかし、この人間教に惹かれる思い、全て人の心の中にあります。ペトロにもありました。ご自身の十字架と復活を預言された主イエス。しかしペトロは主を脇へ連れて行き、「そんなことがあってはなりません」といさめました。このペトロの言葉に、主イエスは激しく答えます。「**退け、サタン。あなたは神のことを考えず人のことを考えている。**」「退け」とは、私の前を行くな、私の後ろに回れ、という意味です。人間教を信じて私の前に行くのではない、真の神を信じて私の後に従いなさい、との主の愛の言葉。主イエス・キリストを信じる者とされ、一度は人間教から脱却した私達も又、気づかぬうちに戻っている事があります。そういう自分の弱さを深く心に留めるからこそ、私達は礼拝し続けるのです。私達を人間教から解放し、真の神の御許に連れ帰る為に命を投げ出された主イエス・キリスト。その主を復活させた天

の御神、この復活の主の十字架のもとに集まり、父なる御神を礼拝し続けます。

4 ペトロの説教

さて、かつては主に叱られたペトロですが、甦りのイエス・キリストと出会い、主の十字架で罪が贖われた事を知りました。そして、今や、キリスト・イエスと同じく神である聖霊に満たされ、権力者を恐れることなく堂々と語ります。支配者たちに妥協し流されることもなく冷静に彼らの混乱を指摘します。「今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてですか」「悪い行いをしたから逮捕されるなら分かります。しかし、善い行いとそれを成す力のために逮捕されるなんて、あなた方のしている事は道理にかないません」と堂々と言ってのけるのです。

しかも、使徒は、尋問という機会を支配者たちに反論するだけにはしておきません。彼らに主イエス・キリストを宣べ伝えようと呼びかけます。「もしそうなら、あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。」私は、この8節後半から12節のペトロの説教を読んで、彼の前の晩のことを想像しました。牢屋に拘留されていた前夜、ペトロは、祈ったのではない、明日自分達を訊問する権力者達に、イエス・キリストを証する言葉が与えられるように、と主のみ名を通して祈ったのだ、と思います。彼が、「殺されるのではないか」という不安に呑み込まれずに、祈ることができた、と私が想像したのも、主イエスが以前、次のように話されていたからです。「会堂や役人、権力者のところに連れていかれた時は、何を言ようか等と心配してはならない。言うべきことは、聖霊がその時に与えてくださる」(ルカ福音書12:11-12)。主の約束が、今こそ実現する事をペトロは祈り求めたでしょう。

そして、その時になりました。聖霊なる御神は、語るべき言葉、主を証する言葉を与えてくださいました。次のような言葉です。「あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。」そして、ペトロは、支配者達が親しんでいた聖書の言葉から詩編第118篇22節を引用します。「この方こそ、『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、隅の親石となった石』です。」以前、神殿で同じ詩編の言葉を引用した主イエスの姿が、ペトロの姿に重なります。その意味はこうです。「建築主である天の御神は、民の指導者という大工達に一軒の家の建築を委ね、『特別な石』をお与えになる。ところが、大工たちは、建築主からのその石を軽んじ投げ棄てる。だがしかし、神は大工たちが投げ棄てたこの石を、まさにその建物全体を支えて立たせる土台の要の石として置かれた。この石なくしては、建物の土台を作ることができない。」神は、どのようにして、この石を隅の親石としたのでしょうか。この石に、つまり、ご自身の独り子に全ての人の罪を肩代わりさせ、十字架に架けて裁く事によって、更に、三日目に主イエスを甦らせることによってです。そうして、ユダヤの指導者達が十字架に架けて殺したイエスこそ、全ての人の救い主、全ての人の隅の親石である、と宣告されたのです。

このキリスト・イエスという隅の親石のおかげで、全ての人に全く新しい可能性が生まれました。私たちが、イエス・キリストを土台とし、一人一人の人生を建て上げることができるようにしてくださった、そして、この世の宗教団体とは全く違う、神を神とする神の民の共同体、信仰共同体をイエス・キリストを土台として建て上げることができるようにしてくださいました。

だから、ペトロは力強く宣言します。「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」人間が選んだ他のどんな石も隅の親石にはなり得ない。宗教的な偉人は沢山いるでしょう、人格者も数えきれないほどいます。しかし、全ての人々の救いの為に死ぬことができるのは、神の独り子イエス・キリスト以外にはいません。神から選ばれた要石、イエス・キリストでなければ、救いの御業は果たせない、堂々たる信仰告白、私達も心から「アーメン」と使徒に声を合わせて告白したい、と思います。この12節については、来週も一緒に考えていきたいと思います。

5 宗教か、生き方か

私は、人が神を造り、これを拝むのが「宗教」だ、と言いました。教祖がいて、信徒に偽りを教え支配し利用しようとしています。イエス・キリストを信じて生きることは、そんな宗教とは、全く違います。イエス・キリストを信じることは、一つの生き方。真の神を神として、十字架と復活の主イエス・キリストを信じ、より頼み、実際に生きることです。自分の人生の全ての事に、主イエス・キリストに関していただく。それは、天で父なる御神の右におられるキリスト・イエスの姿を映し出すように生きる使徒達に倣う生き方であります。イエス・キリストの証人となり続ける歩みです。

この生き方をする者の前には、二つの道があり、私達に決断を迫ります。主イエス・キリストとも使徒とも関係なく、自分を含めた人間を頼りに生きる道か、主イエスにより頼み使徒に倣って生きる道か、のどちらかです。人は目指す方向に進みます、人により頼む者は、人間の方に行く、滅びるしかない道、主イエスにより頼み従う道は、キリストの方へと行く、命、永遠の命への道、聖書はそう語ります。何回、決断を間違えても、決して諦めることはありません。神の御前に立ち帰り、悔い改めて新しく立ち上がる力を頂けばいいのです。いつでもやり直しがききます、チャンスは与えられています。主イエス・キリストを信じて生きるとは、神の御許に立ち帰りつつ生きる道です。

自分を神として生きようとし、悔い改めることなく滅びの道を進んでいた私達一人一人。しかし、主イエスが私達を追いかけて来て、出会ってくださり、共に歩いてくださることで、命への道へと導いてくださいます。小さい者のままで、弱い者のままで、神を必要とする者のままで、主イエスのお姿を映し出す者にさえして下さる、父なる御神を賛美せずにはられません。